



|              |                                                                               |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | シンガポールにおけるキリスト教の更生支援 : The New Charis Mission にみる伝道と支援の結びつき                   |
| Author(s)    | 堀川, みき                                                                        |
| Citation     | 宗教と社会貢献. 2025, 15(1), p. 23-40                                                |
| Version Type | VoR                                                                           |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/100625">https://doi.org/10.18910/100625</a> |
| rights       |                                                                               |
| Note         |                                                                               |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## シンガポールにおけるキリスト教の更生支援

—The New Charis Mission にみる伝道と支援の結びつき—

堀川みき\*

### Offenders' Rehabilitation Support by Christianity in Singapore The Linking of Mission and Rehabilitation Support in The New Charis Mission

HORIKAWA Miki

#### 論文要旨

本稿の目的は、シンガポールの更生支援にキリスト教がどのように関わっているかを明らかにすることである。シンガポールの政府は多宗教国家として、国内における宗教の調和を重要視している。一方で、社会福祉分野においては宗教の積極的な関与を認めている。このような状況下で、元受刑者の更生支援を行うキリスト教系慈善団体 The New Charis Mission (2006 年～) は、シンガポール政府の指針に沿いながらも、キリスト教的価値観を重視し、幅広い更生支援を展開していることが調査によって明らかになった。

**キーワード** シンガポール、キリスト教、元受刑者、更生支援、The New Charis Mission

This paper explains how Christianity is involved in offenders' rehabilitation support in Singapore. The Singapore Government prioritizes religious harmony in the country. On the other hand, it encourages the active involvement of religions in the social welfare. Under these circumstances, The New Charis Mission, a Christian charitable organization that provides rehabilitation supports to offenders, offers a wide range of supports, following the guidelines of the Singapore government, but with an emphasis on Christian values.

**Keywords:** Singapore, Christianity, Offenders, Rehabilitation support, The New Charis Mission

---

\* 長崎大学多文化社会学研究科博士後期課程

## 1. はじめに

シンガポールはさまざまな宗教が共存する国家である<sup>(1)</sup>。シンガポール共和国憲法第 15 条では信教の自由が規定されており<sup>(2)</sup>、国教は定められていない。また、宗教間の対立を引き起こすような行為に対しては、宗教調和維持法に基づいて政府が介入する権限を持つ<sup>(3)</sup>。シンガポール政府は、特定の宗教が優位な力を持つことを避け、多様な宗教を平等に扱うことで、異なる宗教を信仰する国民間の融和を図り、社会の安定を維持している。このように、シンガポール政府は宗教間の調和を重視しつつも、社会福祉分野においては、宗教団体や宗教系慈善団体を含む市民社会組織の積極的な参画を期待している [湯 2021: 167]。すなわち、政府のこの姿勢は、宗教間の調和を維持するという目的と、宗教が積極的に社会福祉に関わることを奨励するという目的を両立させようとするものであり、その両立には一定の緊張関係が存在する可能性がある。例えば、宗教教義に基づく社会福祉活動が評価され、特定の教派・宗派が優位を占めるようになった場合、社会福祉活動としては社会に貢献しているものの、政府が求める「宗教間の調和」との間で摩擦が生じる可能性が考えられる。現在、社会福祉分野においてそのような大きな動きは見られないものの、シンガポール社会では、近年、キリスト教への改宗者が増加している傾向が見られる [杉井 2008]。

宗教は人々に生き方の指針を示す。とりわけ、更生を目指す過程において、過去に犯した罪を背負いながら生きる元受刑者にとって、宗教の影響は大きい。シンガポールでは、元受刑者の更生を支援する活動において、家族や地域社会を巻き込んだアプローチ<sup>(4)</sup>を採用しており [三井 2010、神谷 2017]、そこでは宗教団体や宗教系慈善団体が担う役割も大きい。元受刑者の更生と宗教の関係については、宗教がその人物の更生に貢献しているのか否かがしばしば問われるが、信仰を持つに至ったからといって、必ずしも「更生した」と判断することはできない。例えば、刑務所内でキリスト教に回心した後、更生支援団体の理事長として精力的に活動し、更生して信仰心の篤い人物と見られていた者が、再犯に至ってしまう事例などがある [『朝日新聞』2023.7.20 朝刊]<sup>(5)</sup>。このように、ある人が「更生した」かどうかは、生涯を通じてどのように生きたかによって判断されるものである。したがって、宗

教が元受刑者の更生に貢献しているのか否かについても安易な結論は避けるべきである。

以上を踏まえ、本稿ではシンガポールにおけるキリスト教による更生支援活動を事例とし、キリスト教が元受刑者の更生に貢献しているか否かではなく、その活動におけるキリスト教の関わり方を明らかにすることを目的とする。本稿で取り上げる団体は、居住型の更生支援施設を運営しており、このような施設は、シンガポールにおける更生支援の取り組みの中で、元受刑者に規律と責任感を養わせる重要な場所とされている [Bernadette 2015: 68]。

## 2. 先行研究の検討

### 2-1. シンガポールにおけるキリスト教

シンガポールではさまざまな民族が暮らしており、その中でも華人が人口の約7割を占める<sup>(6)</sup>。華人の多くが、仏教、道教、儒教、祖先崇拝や霊媒信仰の要素が混淆した伝統的な中国宗教を信仰していた。しかし、1980年代以降は、現代的な要素を取り入れつつ、病気や怪我といった個人が抱える問題を、自然の法則を超えた奇跡によって癒すという聖霊の力を強調するキリスト教カリスマ派へ改宗する人が急増<sup>(7)</sup>している [杉井 2008: 2]。その要因としては、近代合理主義イデオロギーの普及や、シンガポール政府による中国宗教の霊媒信仰活動の制限などによって、伝統的な中国宗教の重要性が急速に失速していることが指摘されている [同前: 2-3]。以上は、伝統宗教や主流派の教団が、社会で生じつつある問題や人々の要求に応えられない状況において、人々が霊性・癒しを求めて新宗教運動やスピリチュアリティに惹かれているという動き [櫻井 2017: ii] と捉えられる。

キリスト教カリスマ派の集会に参加する人々は、自分たちは孤立した存在ではなく、一つのビジョンを共有する霊的な共同体の一員であることに強い安心感や帰属意識を得ている [杉井 2008: 20]。このように、キリスト教カリスマ派はシンガポールの人々に、伝統的な中国宗教では与えられない、流動的な現代における生き方の指針をもたらしている。

このような特性は、生き方を示すという点で、元受刑者に再犯とは無縁の

生活のあり方を提供する要素の一つとなりうる。シンガポールのキリスト教カリスマ派のなかでも、宗教的活動にとどまらず、社会福祉分野における慈善活動といった世俗的活動に積極的な教会に City Harvest Church がある [杉井 2011: 32]。そして、この教会は元受刑者の更生を支援する施設と提携しており、礼拝には元受刑者が参加することも多い。

## 2-2. 更生支援と宗教

宗教が関与する社会福祉活動は、宗教的理念のみならず、政教関係の特性を反映した多様な世俗的理念を掲げながら展開される [矢野 2015: 203]。シンガポールは政教分離を原則とし、宗教間の調和を重要視している。一方で、社会福祉政策においては宗教が関与しやすい体制をとっている。というのも、シンガポール政府は、国による手厚い社会福祉支援は、国民の自立意欲を低下させ、また、国家の財政を圧迫するという懸念から、先進国が選択してきた「福祉国家」を明確に否定しており、このような考え方に基づいて、社会福祉政策では個人の自立を促すこと、困窮者等への支援は家族や地域社会における慈善団体などが担うべきという理念が重視されている [湯 2021: 167、Ministry of Social and Family Development] からである。

更生支援は、社会的に排除される傾向にある元受刑者の生活を包括的に支援し、再犯防止を担うことで安心した社会づくりに寄与するという点で社会福祉に含まれる。刑期を終え出所しても、罪を犯した過去が消えるわけではない。そのため、元受刑者は更生を目指して人生を立て直そうとするが、多くの場合、社会での居場所や自己肯定感の欠如に苦悩し、再び犯罪に至るという問題に直面する。そこで、宗教や宗教団体との関わりは、元受刑者が出所後の生活において、過去の過ちを悔い改め、人生を新たな視点から捉え直し、社会とのつながりを修復、あるいは新たに築く機会をつくりだす [Wesley 2023: 65]。このように宗教は、消えない過去と向き合いながら更生を目指す元受刑者に対して、道徳的規範や社会的つながりをもたらす。

シンガポールは宗教の調和を重視する一方で、社会福祉分野においては宗教の積極的な関与を認める体制をとっている。先述したように、近年シンガポールではキリスト教が勢力を強めつつある。そして、元受刑者は更生を目指す過程で生きる指針を必要とするため、宗教と更生支援は互いに結びつきやすい関係にあるといえる。したがって、更生支援にキリスト教が関与

しやすい状況にあるが、そのことがシンガポールにおける宗教間の調和を損なう可能性があるという懸念が生じると考えられる。以上のシンガポールにおける宗教を取り巻く状況を踏まえ、本稿ではシンガポールにおける更生支援にキリスト教がどのように関わり、具体的にどのような活動を行っているのかについて、事例を取り上げながら明らかにしていく。

### 3. 調査概要

#### 3-1. 調査対象

本調査では、シンガポールの非営利慈善団体 The New Charis Mission（以下、TNCM）を対象とした（写真 1）<sup>(8)</sup>。この団体は、シンガポールのキリスト教カリスマ派メガチャーチである City Harvest Church（以下、CHC）と提携している。したがって、キリスト教系の団体である。支援対象者は男性の元受刑者で、再犯の性犯罪者以外である<sup>(9)</sup>。キリスト教系の団体であるが、支援対象者の信仰は問われない。

シンガポールにはキリスト教系の更生支援施設が他に 10 件あるが<sup>(10)</sup>、この施設は日本の更生支援施設<sup>(11)</sup>とつながりがあり、両者の活動内容の比較が今後可能であると考えたため、調査対象として選定した。



写真 1 TNCM 外観（2024 年 1 月 25 日筆者撮影）

#### 3-2. 調査方法

本調査では、TNCM で実施される礼拝の参与観察（2024 年 1 月 25 日 8 時～9 時半頃まで）、TNCM のスタッフ A 氏（元受刑者かつクリスチャン）へのインタビュー調査（2024 年 1 月 25 日 10 時～11 時頃まで）、および CHC

の礼拝の参与観察(2024年1月27日17時～18時半頃まで)を実施した<sup>(12)</sup>。礼拝における牧師の言葉やインタビュー内容の日本語翻訳は、CHCで通訳者として奉仕している方に協力していただいた。

本来の業務が行われる中、調査に協力していただける時間は限られており、業務に支障が出ない範囲でのインタビュー調査は1名が限界であった。加えて、受刑歴を持つという経験を語ることは、話し手に精神的な苦痛が伴う可能性が高い。しかし、今回インタビュー調査に協力してくださったA氏は、快く調査を受け入れてくださった<sup>(13)</sup>。彼は過去にTNCMで更生支援を受けた経験があるが、現在は理事長の補佐として施設の運営に携わり、支援対象者と密接に関わりながら更生支援活動に従事している。そのため、本研究の目的である、具体的な更生支援活動の内容について、支援対象者と支援提供者として長期間TNCMの活動に関与しているA氏から、詳細な情報を聞き取ることができると判断した。

収集したデータをもとに、TNCMの活動理念、具体的な活動内容、「更生」への理解においてキリスト教がどのように関わっているかを考察する。また、CHCとの提携の具体的な内容についても明らかにする。

## 4. 調査結果

### 4-1. 設立背景、活動理念

TNCMは、現在の理事長であるドン・ウォン氏によって2006年に設立された非営利慈善団体である。彼は、14歳の時にギャングに加わり、薬物依存症であった過去がある。刑務所への服役を9回繰り返し、変わりたくても変わることができないことに苦悩し、自殺を考えていた時、刑務所で出会った牧師の言葉が浮かび、キリスト教を信仰するに至っている [Peh 2016]。その後、自分と同じような状態にある人々を助けることを決意し、元受刑者の更生を助けるための居住型更生支援施設を運営するTNCMを設立した。その後、2007年には公益性の高い機関 (Institutions of A Public Character : 以下、IPC) に認定された。IPCとして認められている団体は、地域社会に利益をもたらす活動を行うことが義務付けられている [Ministry of Culture, Community and Youth]。後述するように、TNCMは現在さまざまな社会貢献

活動を展開しているが、元受刑者の更生支援を行うことを主軸としている点は、設立当初から一貫している。さらに、シンガポール刑務所の受刑者に対し、ギャングからの離脱を促す講演を実施するなど、その活動の公益性は高く、2013年にはシンガポール刑務所から表彰を受けている〔The New Charis Mission〕。

TNCMは「HOPE&CHANGE（希望と変化をもたらすこと）」を活動理念に掲げ、元受刑者を中心に、人々の人生をより良い方へ導くことを目的として活動してきている〔The New Charis Mission〕。以上のことから、TNCMは人々に希望と変化をもたらし、再犯防止によって安心できる社会づくりに寄与するという「世俗的」な理念を掲げ、公益性の高い活動を行うキリスト教系の慈善団体であるといえる。しかしながら、次節で述べるように、TNCMの具体的な活動内容では非常に「宗教的」な側面が確認できた。

## 4-2. 活動内容

TNCMの活動内容は大きく二つに分けられる。一つは、段階的な更生支援プログラムの実施である。もう一つは、当該プログラムの修了者が、社会貢献活動に従事することで更生を目指す活動である。具体的には、高齢者支援、刑務所での奉仕活動、海外での宣教活動、若者への教育活動がある。

### 4-2-1. 段階的更生支援プログラム

段階的更生支援プログラムは、TNCMの支援対象者全員が一年を通して参加する。このプログラムは、**Recovery**（回復）、**Restoration**（修復）、**Reintegration**（再統合）の3段階に分けられている。**Recovery**の段階では個人カウンセリングが中心となる。これにより、支援対象者は再犯につながる潜在的な問題点や心理的な葛藤を探ることで自己認識を深め、より良い人生を歩むための対処スキルを身につける。**Restoration**の段階では、個人カウンセリングに加え、家族を含めたカウンセリングが導入され、家族との関係の修復が行われる。それと並行して、職業リハビリテーションを通じ、就職に必要なスキルを習得する。これら複合的な介入により、最後の段階である**Reintegration**への移行を促す。**Reintegration**の段階では、支援対象者の短期・長期的な目標について話し合いながら、プログラム修了後の具体的な計画を立て、目標達成に向けた支援が行われる。

以上が段階的更生支援プログラムの簡単な流れである。そして、このプロ



グラムは、カウンセリングなど臨床的なアプローチを基盤としつつも、信仰を中核に据えている点が特徴である。A 氏はこのプログラムの実施方法について以下のように語る。

ここの更生支援プログラムは信仰が中心です。なぜなら、神様しか私たちを変えることができないと確信しているからです（…中略…）神様との歩み、神様と出会ったことで本当の意味で自分の人生は変わりました。私一人だけがこのように神様によって変わることができたのなら、ラッキーだったといえるかもしれない。でも、多くの人たちが神様との関係を回復しています。

以上のことから、段階的更生支援プログラムにおいて信仰が重要な役割を果たしていることがわかる。その根拠として A 氏は、キリスト教に出会ったことで自分の人生が大きく変化したことを述べている。A 氏は過去に薬物依存症であった時期があり、薬物から離れるために考えられる全ての方法を試した。しかし、負のサイクルから抜け出したいと思っても、結局は同じ状態に戻っていた。そんな彼が変わろうと思ったきっかけが、同じく薬物依存症だった友人がクリスチャンになったことで変わった姿を目の当たりにしたときであった。これは A 氏の主観的な経験に基づくものであるが、TNCM のスタッフとして、良い方向へ変化していく元受刑者の姿を実際に目の当たりし、さらに TNCM が今年で設立 20 周年を迎えることを考慮すると、キリスト教的価値観を重視した更生支援活動は一定の成果を上げ続けていることの証であり、長年にわたり事業を拡大できるほど、TNCM の活動がシンガポール社会に認められていることの証でもある。

このように、公益性の高い非営利慈善団体でありながらも、プログラムの様々な場面において、キリスト教的価値観が随所に反映されている。そのことがよくわかるのが礼拝である。支援対象者はこのプログラムに参加しつつ、TNCM で週に 3 回実施される礼拝への参加も求められる。筆者が参与観察した礼拝には 30 名ほどが参加しており、8 時から 9 時半の 1 時間半の間に、賛美歌（約 40 分）、牧師の説教（約 30 分）、祈り（約 10 分）が行わ

れた。大部分を占めた賛美歌の時間では、ピアノやギターが奏でる現代的な音楽に合わせて（写真 2）、参加者は目を閉じながら、両腕を広げ、手のひらを上に向けながら歌っていた。祈りの際は、それぞれが異言を話し、時には涙を流し感情を露わにしながら神への祈りが行われていた。礼拝は全体を通して大きな音楽と参加者の神への想いが体全体を包み込むような、一体感を感じさせる空間であった。



写真 2 礼拝における賛美歌演奏の様子（2024 年 1 月 25 日筆者撮影）

先述したように、TNCM の支援対象者は全員がクリスチャンであるとは限らないが、礼拝には原則として参加する方針をとっている。ただし、支援対象者は「キリスト教に基づいた支援」であることについてあらかじめ説明を受けており、口頭ではあるが、彼らがそれに同意するという段階を経て入居している。それでも、最初から礼拝への参加が難しい人に対しては、時間をかけて参加するように「支援」している。聖書を読む、神に祈るといった方法ではなく、元受刑者という共通する経験をもとに、自分が過去からどのように変わっていったのかという話を伝えるという方法での「支援」である。A 氏はクリスチャンでない支援対象者への接し方について次のように述べている。

聖書の中に「神様（God）があなたの心の扉の前に立って、叩いている。あなたが心を開いた時に神様はあなたに入ってくる」という箇所があります。無理やりなどはしません。私たちはプログラムのときに「信じろ」なんて言いません。強制しても意味がないからです。クリスチャンでない状態でここに來た人たちは、最終的には「神様を信じたいです」と彼らの方から言ってきます。心を開いた時に神様が入ってきてくださるのです。

以上のような方法で、「クリスチャンでなかった人も 1 ヶ月ほどで改宗」していくという。この取り組みにおいて強調されるのは、キリスト教を受け入

れる準備ができていない人に対して、信仰を強制することではなく、本人の自由な意思で信仰に至る過程を大切にしている点である。そして、そのような対応は、A 氏の言葉からもわかるように聖書の言葉に基づいている<sup>(14)</sup>。しかし、自分が過去からどのように変わったのかを伝えることによる「支援」では、直接的にキリスト教の用語を用いることはなくても、クリスチャンでない支援対象者の意識を神に向かわせることを促そうとする点において、伝道と結びついた更生支援である。

一方で、礼拝などを含む TNCM の生活に馴染めず、退去に至った人が全くいないとは言い切れない。今回の調査では、入居者数とそれに占める途中退去者数を明らかにすることはできなかったが、今後も継続して調査を実施することで詳細を分析することが課題である。しかしながら、次項でも述べるように、あらかじめ刑務所内でキリスト教に関心を抱いた者が TNCM に入居するケースが多いため、入居後に信仰の違いが原因で退去に至った事例は少ないと考えられる。

#### 4-2-2. 社会貢献活動による更生支援

段階的更生支援プログラムを修了した後は、他者のために働くプラットフォームが TNCM では整備されている。具体的な内容を、高齢者支援、刑務所での奉仕活動、海外での宣教活動、若者への教育活動の順で説明する。

高齢者支援では、高齢者の自宅を定期的に訪問し、血圧測定や爪切りなどの健康管理、部屋の清掃、刑務所内で習得した技術を活かしたヘアカットなどを実施し、孤独に暮らす高齢者の生活に喜びと安らぎをもたらす活動を行なっている。

刑務所での奉仕活動では、TNCM の支援を受けている元受刑者が受刑者に対しカウンセリングや聖書学習のプログラムを実施している。このプログラムは週に 3 回の頻度で 6~7 ヶ月に渡り実施される。これは CHC による聖書学校 (以下、SOT)<sup>(15)</sup>と連携して行われており、使用される教材も SOT のものが多い。刑務所への奉仕活動は非常に精力的に行われており、出所後に TNCM に来る人の多くが、シンガポール刑務所内でこの聖書学習プログラムに参加している。

海外での宣教活動では、海外の刑務所や更生支援施設、孤児院などを訪問し、更生支援に関する知識や経験の共有が行われている。日本にも訪問し、熊本県の更生支援施設はじめ、複数の更生支援関連団体と交流がある。

若者への教育活動では、毎週月曜日に学校を訪問し、学生に対して TNCM の活動を紹介したり、薬物やマフィアなど社会における危険について実体験を交えながら教えている。また、非行に走る学生を抱える先生の相談にも対応している。

このように、段階的な更生支援プログラムを修了した後は、社会貢献活動を通して、支援対象者が社会の役に立てる場所を見出したり、新たな目標を定めたり、自己肯定感を高めることで更生を目指すことができるプラットフォームが TNCM には整えられている。以上に述べてきたように、TNCM は更生支援活動を幅広く実施している。そして、このような多岐にわたる活動を支える資金の大部分は、活動に共感する人たちからの寄付で賄われており、政府からの公的な経済的支援はない。A 氏は資金と活動内容について以下のように述べている。

もし、政府からお金をもらうと、政府の方から「あれをしろ」「これをしろ」と条件が出てきます。そうすると、信仰中心のプログラムをすることはできません。

以上のことから、TNCM にとってキリスト教の信仰をその活動の中心に据えることが重要であることがわかる。公益性の高い慈善団体でありながらも、礼拝の参加をプログラムに組み込んでいたり、次節で述べるように、更生において「霊的訓練」が重視されるなど、宗教活動を比較的自由に実施することができているのは、公的機関に頼ることなく資金が集まるためである。そして、その背景には、提携している CHC がメガチャーチであることや、シンガポールにおけるキリスト教徒の割合が増加傾向にあり、キリスト教が社会に根付きつつあることが考えられる。

キリスト教的要素を強く感じられる活動ではありつつも、2021 年に TNCM が発行している雑誌には、シンガポール刑務所長からの寄稿がある。そこでは、内務省（Ministry of Home Affairs）の管轄下でシンガポール刑務所を運営する監獄局（Singapore Prison Service）<sup>(16)</sup>と TNCM のパートナーシップについて言及した後、TNCM の活動を評価するメッセージが述べられており [The New Charis Mission 2021]、TNCM は公的な経済的支援を受けていないが、その活動は公的機関から高く評価されていることも明らかである。

### 4-3. 「更生」に必要なもの

元受刑者が「更生した」と断言することは容易ではないが、理想的な更生像がないと更生支援の軸がぶれてしまう。先述したように、支援対象者が必ず参加する更生支援プログラムは三段階（Recovery、Restoration、Reintegration）に分けられる。そして、最後の段階（Reintegration）に移るために必要な条件が三つある。第一は「霊的訓練」、第二は「自己理解」、第三は「家族を含む社会からのサポート」である。更生に必要なこととしてよく挙げられるのは、家族・親族の存在や住む場所、仕事であるが、それらを差し置いて第一に「霊的訓練」が挙げられている。霊的訓練とは、聖書の言葉を正しく理解できるようになるための訓練である。したがって、TNCM では、支援対象者は「更生」を目指すうえで信仰を持つことが勧められており、「更生には回心が不可欠」、「更生とは回心すること」という認識が強い。TNCM の働きと神との関係について A 氏は以下のように語る。

あなたたちを神様がおられる環境に連れていくことが私たちの仕事だよ、と兄弟たちに伝えています。私たちは彼らの代わりに、彼らと神様の関係を築いてあげることはできません。彼らが自分で神様を見つめようとしなさいといけないのです。

TNCM は非営利慈善団体として活動を行なっている点を考慮すると、「仕事」として日々行われていることは更生支援である。しかし、この発言からは更生支援という業務に加えて、支援対象者にキリスト教について伝えること、つまり伝道も「仕事」に含まれているということがわかる。すなわち、TNCM における「仕事」とは、更生支援でもあり、伝道という宗教活動でもあると捉えることができる。だが、TNCM スタッフが支援対象者にできることは、あくまでも環境を整えることまでであり、そこから先、支援対象者が神と関係を構築するかどうかは彼ら次第であり、主体性が尊重されている。そして、支援対象者の主体性が尊重される点は、シンガポール政府の社会福祉政策における個人の自立を促す理念と重なる部分でもある。

A 氏の発言にもあるように、神との関係を築き上げる過程では、他者ではなく、自分の意志が重要となる。目に見えない存在である神が、いかにして信者にとって「現実の存在」となるのかを研究するターニャ・M・ラーマン

[2024] は、神との関係つまり目に見えない他者を信仰の中心に据え、生活の中に存在させるためには、儀式や祈りなど集中力を必要とする行為に時間を費やし、神の存在を感じるために訓練を継続するという個人の「努力」が必要であると指摘した。TNCM においては、霊的訓練という努力を必要とする行為が更生支援プログラムの中に組み込まれており、それによって信仰に至るようになっていく。そして、その努力は臨床的な更生支援と絡み合いながら積み重なっていく。

#### 4-4. 教会との関係—City Harvest Church

TNCM は特定の教団の傘下にあるわけではないが、CHC と提携している。そのため、TNCM の支援対象者は、もともと通っていた別の教会がある場合を除いて、約 85% の人が CHC の礼拝に参加するようになっていく（写真 3）。

CHC の信徒は現在 21,000 人である(17)。毎週土曜日と日曜日に礼拝が実施され、サンテック・シンガポール国際会議展示場に約 3,500 人が集まる（コロナ禍以前は約 6,000 人：写真 4）。また、礼拝の様子はインターネットで世界中に同時配信され、CHC に所属している通訳者によりインドネシア語、フィリピン語、日本語、広東語、福建語に翻訳される<sup>(18)</sup>。礼拝時間の前には、祈りの会や聖書の勉強会が行われている。礼拝終了後は、母語や出身地などが同じ 10



写真 3 礼拝会場入口付近（2024 年 1 月 27 日 筆者撮影）



写真 4 CHC の礼拝の様子 [City Harvest Church]

～20 人程度の信徒で構成されるセルグループで集まり、礼拝の感想や最近の悩みをシェアしたり、メンバーの誕生日を祝ったりする。CHC の礼拝は、

TNCM の礼拝と比較して何十倍も大きい規模で実施されるものであり、ここに参加する TNCM の支援対象者たちは、神を信じるという共通の信仰と、神による救済への期待から生まれる、より大きな一体感や安心感を体験していると考えられる。このような空間は、社会から排除される傾向にある元受刑者にとって、社会の中で安心できる居場所となる。

CHC の礼拝会場の一つとなっているサンテック・シンガポール国際会議展示場は 2010 年 3 月に CHC が一部権益を取得した施設である。この動きに対してシンガポール政府は 2010 年 7 月に、宗教法人が商業施設を利用する際のガイドラインを設け、一般商業施設を宗教目的で使用する場合、使用面積に上限を設けると同時に、宗教活動目的での一般商業施設の利用を週二日に限定した [本田 2021: 108]。これは、他の宗教との調和を維持するための策であると考えられる。参与観察時に、「いい活動をしているのに週に二日しか使えないのは悲しい」と思いを語る CHC の信徒がいたように、信徒と政府間の意見の相違が浮き彫りになる出来事の一つであると言える。

## 5. 結論と今後の展望

シンガポール政府は宗教間の調和を重視し、複数の宗教の共存を強調している。一方で、社会福祉分野においては宗教の積極的な関与を認めている。近年、シンガポールでは基督教が勢力を強めており、また、宗教と更生支援は互いに結びつきやすい関係にある。シンガポールにおける更生支援施設は基督教系が圧倒的に多いとされるため、更生支援という社会福祉分野においては基督教が優位になるということも考えられるだろう。したがって、更生支援に基督教が関わる比重が増していけば、シンガポールにおける宗教勢力的な面でのバランスに変化が生じ、結果として、宗教間の調和が損なわれてしまう懸念が生じると考えられる。本稿の目的は、以上のような宗教をめぐる状況にあるシンガポールにおいて、更生支援に基督教がどのように関わっているのかを明らかにすることであった。そのため、基督教系慈善団体 TNCM の調査を行った。

TNCM は公益性の高い団体でありながらも、結果的に信徒を多く輩出するプログラムを中心に更生支援を展開しており、神との関係構築を促すと

いう意味で非常に「宗教的」であることが明らかになった。ただし、「宗教的」な目的だけでなく、家族を含めた地域社会との関係を回復させるといった、信仰を共有しない団体からも理解が得られやすい「世俗的」な取り組みがなされており、シンガポール政府が掲げる価値観とキリスト教的価値観が織り交ぜられながら活動が展開されていた。

本稿で取り上げたものはシンガポールにおける更生支援の一事例であったため、活動の独自性や一般性について詳細に分析することには限界があった。シンガポールには TNCM のようなキリスト教系の更生支援施設のほかに、仏教系、イスラーム系があるため、今後はこれらを比較対象に見据え、それぞれの活動の独自性や一般性について考察していきたい。加えて、日本には TNCM の活動をモデルにした更生支援施設が存在する。したがって、各国における宗教を取り巻く状況や社会福祉制度のあり方などを踏まえた上で、両者の活動理念におけるキリスト教的価値観の表れの度合い、更生支援活動の具体的な内容、活動規模の違いを比較検討し、更生支援と宗教の関係性について更なる考察を深めることも今後の課題としていきたい。

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、多大なご協力を賜りました The New Charis Mission の皆様、City Harvest Church の皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は長崎大学プラネタリーヘルス研究奨励金の助成を受けたものです。

## 註

- (1) シンガポールにおける宗教の割合は仏教 31.1%、キリスト教 18.9%、イスラーム 15.6%、道教 8.8%、ヒンドゥー教 5.0%、その他 0.6%、無宗教 20.0%である [Department of Statistics Singapore 2020]。
- (2) 第 15 条第 1 項「誰もが信仰の告白、実践及び布教を行う権利を有する」(Every person has the right to profess and practise his religion and to propagate it) [一般社団法人自治体国際化協会 2023、Singapore Statutes Online]。
- (3) 宗教間の対立を引き起こす行為を行なった宗教団体の指導者に対し、禁止命令を発する権限が内務大臣に与えられている [本田 2021: 107-108]。
- (4) Strengthen Families, Engage Community Framework [三井 2010: 34]。
- (5) この団体の理事長は前科三犯であり、約 20 年間を刑務所の中で過ごした。刑務所の中で回心し、出所後はカトリックの洗礼を受け、2014 年に更生支援を行う団体を設立し、理事長となる。しかし、2023 年に事件を起こし、現在は理事長



を辞任している。前理事長の詳しい経歴については五十嵐 [2016] を参照されたい。

- (6) シンガポールの民族の割合は中華系 74.3%、マレー系 13.5%、インド系 9.0%、その他 3.2%である [Department of Statistics Singapore 2020]。
- (7) 1980 年の人口におけるキリスト教徒の割合は 10.1% [Department of Statistics Singapore 2000]、2020 年は 18.9%に増加している [Department of Statistics Singapore 2020]。
- (8) シンガポールの中心部から少し東のゲイラン地区に位置する。
- (9) 運営に女性スタッフがいることを考慮しての受け入れ基準である。
- (10) そのほかイスラーム系が 2 件、仏教系が 1 件で、更生支援に関わる団体はキリスト教系が最も多い (2024 年 1 月 25 日調査時点)。
- (11) 熊本県熊本市の NPO 法人オリーブの家。この法人の理事長は、熊本刑務所を出所後、8 ヶ月間の CHC 聖書学校 (SOT) に参加し、その期間のうち 1 ヶ月を TNCM で生活している。NPO 法人オリーブの家の活動についての詳細は [堀川 2024] を参照されたい。
- (12) 時間はシンガポール現地時刻で記載している。
- (13) A 氏からのインタビューの掲載許可を得ている。また、調査時に通訳をしてくださった方には日本語の確認をしていただいた。
- (14) ヨハネの黙示録 3 章 20 節「見よ、わたしは戸の外に立ってたたいている、だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしはその人のところに入って彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする」[新日本聖書刊行会 2017: 〈新〉496]。
- (15) School of Theology の略称 [City Harvest Church]。
- (16) 三井 [2010] による私訳。
- (17) 2024 年 1 月 27 日参与観察時の発言から。
- (18) CHC は現在、提携している教会が 12 カ国に合計 153 ある。日本の熊本ハーベストチャーチも CHC の提携教会である。2024 年 11 月に熊本ハーベストチャーチの新しい教会で行われたセレモニーには CHC の牧師が参加し、メッセージを述べている。また、この教会の牧師は熊本刑務所で教誨師として長年、更生支援活動に従事しており、2025 年には藍綬褒章を受賞している。彼は中学生の頃に CHC の代表コン・ヒー氏に出会い、改宗に至っている。

## 参考文献

- 五十嵐弘志 2016 『人生を変える出会いの力 闇から光へ』ドン・ボスコ社。
- 一般社団法人自治体国際化協会 2023 「シンガポールの宗教政策にみる多文化共生への取り組み」 (<https://www.clair.or.jp/tabunka/portal/publish/docs/537.pdf>、最終閲覧日 2025 年 2 月 28 日)。
- 神谷英亮 2017 「世界の保護観察事情 (16) 地域社会と情熱と：シンガポール共和国の社会内処遇」『更生保護』68 (5) : 58-61。
- 櫻井義秀 2017 「はじめに」 櫻井義秀編著『現代中国の宗教変動とアジアのキリス

- ト教』北海道大学出版会：i-x。
- 杉井純一 2008 「シンガポールのカリスマ運動」『宗教研究』82(1)：1-23。
- 2011 「カリスマ運動の世俗化—シンガポール・シティハーベスト教会の事例—」『文化』29：15-36。
- 新日本聖書刊行会 2017 『聖書 新改訳 2017』いのちのことば社。
- 湯玲玲 2021 「社会福祉—自立と家族支援が基本—」田村慶子編著『シンガポールを知るための65章』明石書店：166-170。
- 三井英紀 2010 「シンガポールにおける更生保護制度—青少年に対するプロベーションを中心に—」『犯罪と非行に関する全国協議会機関誌』105：25-35。
- 無署名 2023 「NPO 法人前理事長、相談女性に性的暴行か」『朝日新聞』、2023 年 7 月 20 日、朝刊、朝日新聞クロスサーチ (<https://xsearch.asahi.com/kiji/detail/?1740739717873>、最終閲覧日 2025 年 2 月 28 日)。
- 堀川みき 2024 「キリスト教と更生支援—『NPO 法人オリーブの家』の事例を通して—」『宗教と社会』30：33-46。
- 本田智津絵 2021 「宗教—キリスト教と無宗教、二極化する宗教—」田村慶子編著『シンガポールを知るための65章』明石書店：106-109。
- 矢野秀武 2015 「東南アジアの政教関係—その制度化の諸相—」櫻井義秀・外川昌彦・矢野秀武編著『アジアの社会参加仏教—政教関係の視座から』北海道大学出版会：199-217。
- ラーマン、M・ターニャ 2024 『リアル・メイキング—いかにして「神」は現実となるのか』柳澤田実訳、慶應義塾大学出版会。
- Bernadette, Alexander. 2015 “Probation as a Community-Based Rehabilitation Programme (Singapore)” United Nations Asia and Far East Institution, ([https://www.unafei.or.jp/publications/Resource\\_Material\\_96.html](https://www.unafei.or.jp/publications/Resource_Material_96.html), accessed on January 23, 2025).
- City Harvest Church, The City Harvest Story, (<https://www.chc.org.sg/about-us/the-city-harvest-story>, accessed on January 28, 2025).
- Department of Statistics Singapore, 2000, Singapore Census of Population 2000.
- , 2020, Census of Population 2020, Statistical Release 1: Demographic Characteristics, Education, Language and Religion.
- Ministry of Culture, Community and Youth, About IPCs, (<https://www.charities.gov.sg/Pages/Charities-and-IPCs/IPCs/About-IPCs.aspx#>, accessed on January 27, 2025).
- Ministry of Social and Family Development, Mission & Values, (<https://www.msf.gov.sg/who-we-are/mission-values>, accessed on January 28, 2025).
- Peh Marilyn, 2016 “From Gangs to God - Pastor’s drug past fuels passion to help others,” *THE PRIDE*, July 8, 2016, (<https://pride.kindness.sg/gangs-god-pastors-drug-past-fuels-passion-help-others/>, accessed on March 1, 2025).

Singapore Statutes Online, Constitution of the Republic of Singapore, (<https://sso.agc.gov.sg/Act/CONS1963?ProvIds=P14->, accessed on January 29, 2025).

The New Charis Mission, About us, (<https://www.thenewcharismission.org.sg/about-us>, accessed on January 27, 2025).

———, 2021, Standing on Goodness and Mercy.

Wesley D, Cohoon. 2023 “Evangelical Christianity and Criminal Rehabilitation: A Clinical Sociological Approach to Stigma and Identity Management,” *Clinical Sociology Review*, 18(2) : 48-82.